地域子ども・子育て活動支援助成事業　実施報告書（別紙２）

団体名	ここにわ

取組の名称	若者カフェ及び関連事業
実施場所	コミュニティカフェ「メサグランデ」
対象地域	川崎市全域
対象地域の特色・課題	バブル崩壊以降、不安定雇用や未就労、ひきこもり、孤独など「生きづらさ」を抱える若者が増えている。氷河期世代と言われた世代は 40 代を超えたが、いまだ、不安定雇用のままで苦しんでいる人も多い。 また、ここ数年で、40 歳以上のひきこもりの実態も明らかにされ、川崎市内の状況についていえば、ひきこもりと言える人は 1 万人程度いると想定されている。川崎市でも、地域ひきこもり支援センター設置の構想が進んでいるが、相談だけでなく、一歩踏み出すための居場所の必要は高い。 さらに、氷河期世代はすでに親となる年齢層であり、貧困の中で育ち、社会人となっていく子どもたちも少なからずいると考えられる。子どもについては、さまざまな支援策が講じられているものの、大人になるとなかなか支援を受けられないという状況があるといえる。 昨年からは、新型コロナの感染拡大が追い打ちをかけ、生活困窮や孤立に陥る人々が、若者をはじめ幅広い層に増えていることも、新たな課題となっている。
取組の趣旨・目的	「若者カフェ」は生きづらさを抱える若者を対象としているが、若者だけでなく、どの世代でも参加できることとしている。「若者カフェ」では、若者が食事をし、お茶を飲みながらゆったりとくつろぎ、いろいろな世代、立場の人と気兼ねなく交流し、相互に認め合い、エンパワーメントし合える場をめざしている。

<table>
<tr><td>実施内容・実施スケジュール</td><td colspan="3">〇若者カフェ
・実施日時　4 月～3 月の毎月第 4 土曜午後 1 時～3 時 30 分　全 12 回
・会場　コミュニティカフェ「メサグランランデ」
・飲食の提供で場を和ませ、参加者同士の交流をメインとする交流をより深めるために、ファシリテーターを置く。

〇令和３年度も緊急事態宣言やまん延防止重点措置が行われたが、会場となるメサグランデが休業の対象とならなかったことや、コロナ禍で孤立や困窮に陥る人も少なからずいるということを考えて、できる限りの感染防止に努めながら、開催し続けた。
　新型コロナ防止のため２年度は開催時間を１時～３時しており、助成金申請の際には開催時間１時～３時としていたが、交流の時間を大事にするために１時～３時半に変更した。</td></tr>
<tr><td>参加者の年代</td><td>10 代～70 代</td><td>定員
（１回あたり）</td><td>15 人</td></tr>
<tr><td>実施頻度</td><td>毎月１回</td><td>活動日数
（年間）</td><td>１２日</td></tr>
<tr><td>スタッフ体制</td><td colspan="3">ここにわメンバー３人＋ボランティアメンバー２～４人</td></tr>
<tr><td>連携する団体・連携の手法</td><td colspan="3">メサグランデを利用している子ども・若者関連の活動として、「若者カフェ」のほかに、みんなの食堂「メサミール＋」、学習支援「てらこみーる」、ひとり親家庭のための「ママの応援」があり、セカンドリーグ神奈川の呼びかけで「ビーバーネット＠武蔵新城」と称して共同の PR を行うとともに、フードバンク神奈川から食材の提供を受けた。
連携しているもの一つ、ひとり親家庭のための「ママの応援」もコロナ禍のために集まりを持てずに食材提供のみとなることがあったため、若者カフェで食材受け渡しを代行するなどの具体的な連携を行った。</td></tr>
<tr><td>取組実施により見込まれた効果</td><td colspan="3">　ここにわの活動は、バブル崩壊後のいわゆる氷河期世代を念頭に若者支援活動としてはじめたものである。
　その後、若者カフェを続けていく中で、うつなどの精神的疾病、障がい、ひきこもり、就労困難や不安定雇用、人間関係の困難や孤独・孤立など、さまざまな困難や生きづらさを抱える人が参加してくれた。その課題の多様さにひとつひとつ応えるにはもとより力不足であるが、他人同士が場と時間を共有するという体験によって、</td></tr>
</table>

	若者や家族、多世代の人たちがエンパワーメントされる場となっていると考えて活動を継続してきた。 　３年度は、ともかくカフェを開き続けることを目標にしてきたが、これまでよりも継続して参加してくれる方が増えてきており、話し合いも活性化しているように見える。 コロナ禍の行動制限の中、家族親族関係、学校や職場などの組織関係でない、まったくの赤の他人と出会い交流することの意味、そこから力をもらうことがあるということを、みんなが実感していたのではないかと思える一年であった。 　近年、「居場所」活動は、高齢者のサロンをはじめ多様な形で広がってきているが、そこへ急浮上したコロナ禍のために休業を余儀なくされることも多かった。しかし、逆にそんな折であるからこそ「居場所」の意義が問いなおされているように見える。